

東大の良問  
10に学ぶ  
日本史の思考法

清野孝弥

監修 西岡吉誠

東大日本史の  
ユニークな問題で、  
歴史の教養が  
楽しく身につく!

• 伊藤博文の  
側近になりきって  
憲法を作り上げる

• 予備校の  
模範解答に潜んだ  
間違いを発見する

• 大国に挟まれた  
琉球王国の生き残り戦略を  
一次史料から読み解く...etc.



東大の良問10に学ぶ日本史の思考法

清野孝弥

監修 西岡孝誠

星海社

337



SEIKAISHA  
SHINSHO



## はじめに 日本史を学ぶとは

突然ですが質問です。

「平安時代に藤原家はどのよう<sup>に</sup>して権力を握ったのか、その方法<sup>に</sup>について記述せよ」という問題と「平安時代に藤原家はなぜ<sup>に</sup>権力を握ったのか、その理由<sup>に</sup>について記述せよ」という問題。どちらが東大入試の問題だと思いますか？

答えは後者、理由を記述させる問題です。どちらの問題も難しそうな記述問題であることに変わりはありませんが、実は、両者は全く異なるものなのです。

「どのよう<sup>に</sup>して」という方法 (How) を説明するためには、「知識」が必要です。例えば、「どのよう<sup>に</sup>して人は生きるのか」という問い。この問いに解答するためには、「食物からどのようにエネルギーを摂取しているのか」といった生物学の知識が必要になるため、「知

らないと解答できない」という意味で難しい問いです。

一方で、「なぜ」という理由 (Why) を説明するためには、「思考」が必要です。「どのようにして人は生きるのか」という問いを「なぜ人は生きるのか」という問いに変換すると、一気に哲学的な問いになります。唯一の答えが存在しない分、自分の知識を前提にしながら「思考をしないと解答できない」という意味で難しい問いです。

そこで皆さんに再度質問です。私たちが学ぶべきは日本史の「知識」でしょうか。それとも日本史の「思考」でしょうか。この問いに正解はありませんが、私なら「日本史の思考を学ぶべき」と回答します。

日本史の知識は、日本史の流れを掴む<sup>つか</sup>上でとても有用なものです。「知識なくして思考なし」と言われるように、日本史の知識が増えるほど豊かな歴史の見方ができるようになるのは確かです。しかし、AIが発達した現代社会においては、知識を暗記しておく必要性は失われました。調べればわかることをなぜ覚えておく必要があるのかという点で、日本史の知識を学ぶ意義には疑問が残ります。また、歴史上の人物や出来事について知ったとしても、それは過去のものには過ぎません。歴史上の「点」となる知識を身につけたとして

も、それ以上の教訓は得られないため、残念です。

一方の日本史の思考は、日本史の知識が「点」なら、それらを貫く「線」を見つければ作業だと言えます。人間の性質は時代を経ても変わらないものです。権力の座につけば驕り高ぶることも、お金が増えれば放漫な生活を送ることも人間の性さがでしょう。こうした変わらない（あるいは、変えられない）人間が織りなす歴史に対して、「歴史は繰り返す」とローマの歴史家は述べました。このように歴史には一定の法則性があり、それらは歴史上の事実を一つ一つ線で結んでいくことで浮かび上がってきます。

ドイツ帝国初代宰相さいしやうのビスマルクは、「愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」と言いました。この「歴史に学ぶ」というのは、過去のことを「点」としてではなく、未来にもつながる「線」という思考で学ぶということを表しています。

変化いぢじるの著しい現代社会においては、過去の「点」でしかない日本史の知識は役立ちませぬ。むしろ、私たちが学ぶべきは、私たちに、未来をどう生きていくかという生き方の軸を与えてくれる「日本史の思考法」なのです。

## 本書と著者について

日本史の思考法を学ぶにあたって、東大日本史の問題は最高の教材です。東大日本史には、教科書通りの知識を問うような問題は一切なく、与えられた史料を丹念に読解し、日本史を貫く思考法を発見させる良問が揃っています。そこで本書では、「受験」としてではなく「教養」として東大日本史を学ぶことができるよう、問題解説の仕方を大幅に工夫しています。例えば、年号や人物名など、「点」としての知識に過ぎない内容は最低限に抑え、「線」としての思考法を養うのに大切な、日本史の流れや仕組みの説明に注力しました。

また、皆さんに東大日本史の魅力を感じてもらえるよう、深い考察を提供することに努めました。本書の中では、東大日本史を徹底的に考察した結果として現代にも活きる教訓が様々な形で登場してきます。本質に迫る探求の中では、一見日本史の内容とは思えないところまで深掘りすることも時には大切です。東大の良問10を通じて、日本史の思考法の奥深さに唸ること間違いありません。ぜひ最後までお楽しみください。

自己紹介が遅れましたが、私は清野孝弥と申します。公立高校から独学で東京大学文科I類に合格し、現在は東京大学法学部に進学して勉学に励んでいます。私は東大受験生として、そして東大受験の指導者として、これまで100年分以上にわたる日本史の入試問

題を研究してきました。その中でも特に東大日本史の問題は、噛めば噛むほど深みが出てくる最高の教材でした。しかし、東大日本史を学べるのは一部の受験生だけで、他の方々が学べる機会が限られていることにもどかしさを感じていました。そこで、「東大日本史から培<sup>つちか</sup>える思考法はもっと世に知られるべきだ」との想いから、本書を執筆しました。

本書は、日本史を知る本ではなく、日本史を考える本です。考察には正解がない分、他者の考察を批判的に検討することこそ、より深めることができます。本書では「東大日本史は、何を伝えているのか」という出題者側の視点だけでなく、「現役東大生はどう日本史を考察するのか」という筆者側の視点を多分に盛り込んでいます。筆者の考察だけが全てではないことを前提に、本書に対して批判的な検討をしていただけたら幸いです。

目次

はじめに 日本史を学ぶとは 3

第1問

古代

外交における本音と建前

2003年第1問 11

第2問

古代

肩書きだけの上司による地方支配

2016年第1問 37

第3問

古代

予備校の模範解答を批判せよ

1983年第1問 63

第4問

中世

諸刃もろはの剣つるぎとしての武士

1987年第2問 85

第5問

中世

巧みすぎる室町幕府の財政

2018年第2問 105

第 6 問

近世

江戸時代に天皇家が存続した理由

1994年第3問

127

第 7 問

近世

生類憐みの令しよるいあわれを評価せよ

2022年第3問

147

第 8 問

近世

琉球王国りゅうきゅうの生き残り戦略

2006年第3問

171

第 9 問

近代

伊藤博文の側近として憲法を作り上げよ

1989年第4問

195

第 10 問

近代

日本国憲法の弱点を検討せよ

2005年第4問

215

おわりに

241



第 1 問

古代

# 外交における 本音と建前

2003 年第 1 問

# 導入編

最初の問題では、古代日本の外交に関するテーマを扱います。今回の問題で登場するのは「日本」「新羅<sup>しらぎ</sup>」「唐」の三カ国です。新羅とは、朝鮮半島を支配していた国。唐とは現在の中国に対応する地域を支配していた国。つまり、日本・朝鮮・中国の三つの地域に関する話がトピックになっています。

日本史の問題なのにいきなり、世界史の内容が始まるのかと驚いた方もいるかもしれませんが、古代においても現代と同様、外交問題は国内情勢に大きな影響を及ぼすテーマでした。古代日本の外交は「本音」と「建前」が入り混じるとしても学びがいのある内容です。まずは、前提となる日本・新羅・唐の関係について簡単に確認してから、東大日本史の問題に取り組んでみましょう。

今回取り扱う時代は、8世紀頃。日本では奈良時代の頃に該当します。この当時の東アジアにおいては、唐が圧倒的な力を有していました。唐は周辺諸国よりも優れた軍事力や経済力を背景に、外交上優位な立場にあったのです。そして、唐をピラミッドの頂点とする「中華思想」が存在していました。「中華思想って何？」と疑問に思った方も多いと思うのですが、この概念は、日本史においても、世界史においても登場する非常に重要な概念なので、あらかじめ理解しておきましょう。

「中華思想」とは、中国こそが文明の中心であって、周辺の国々は野蛮であるという考え方です。中国の皇帝は天から統治を任されていて、周辺の野蛮な民族を支配していく使命がある。こうした考え方は、長らく中国の伝統的な価値観を形成してきました。日本史に詳しい方でしたら、日本は弥生時代やよいに、卑弥呼ひみこが中国の皇帝から「親魏倭王しんぎわおう」の金印を受け取ったという話を聞いたことがあるかもしれません。これも結局は「魏（中国）」と親しい倭（日本）の王として認める」という意味ですから、中国を中心とした価値観があったことが読み取れます。

以上のような「中華思想」が唐では信じられていたわけですが、実はその中に、今回登場する日本や新羅も含まれていました。唐（中国）に対して貢物みつぎものを送ることを朝貢ちょうこうと言

いますが、この朝貢を日本も新羅も行っていました。実は、朝貢に関連した概念を、皆さんはすでに学校で習っています。小学校や中学校で習う「遣唐使けんとうし」という用語は、「唐（中国）に遣わす使節」という意味です。遣唐使が何を遣わしていたのかといえ、それは朝貢に行く使者たちです。「20年に1回遣唐使を派遣していた」などといった形で、朝貢を行っていた記録が残っていますから、客観的に見れば、中国の中華思想の中に、日本も組み込まれていたということです。しかし、ここからが今回の問題の面白いポイントなのですが、日本は「主観的には」中国の中華思想に組み込まれることを認めていませんでした。

その理由を探るには、時代を少し遡さかのぼって7世紀の話をする必要があります。日本は7世紀後半に、日本と友好関係にあった朝鮮半島南部の百濟くだらという国を守るため、唐・新羅と戦ったことがありました。これを白村江の戦いと言いますが、実は、日本はこの戦いで大敗を喫きしてしまつたのです。このことがきっかけとなって、日本は唐や新羅と「いつ戦争になるかわからない」険悪な関係になってしまいました。そこで、日本は、唐や新羅と表面上は外交を続けながらも、特に唐という大国に対抗するために、国内改革を進めることになりました。

しかし国内改革を進めると言っても、見本がなければ話になりません。そこで、日本は、

当時最先端の制度や文化を有していた唐（中国）に倣<sup>なら</sup>って、改革を進めることになりました。例えば、平城京（奈良時代の首都の一つ）や平安京（平安時代の首都）などは、中国の都市をモデルに設計されたものです。また、古代日本の法律の多くも、中国から輸入してきたものです。つまり、国内改革の多くは、中国の様式を参考にしながらも、日本独自の要素が付け加えられながら進んでいきました。

ところが問題は、日本は中国に対抗するために、その外交理念までも再現しようとしたのです。中国がピラミッドの頂点にいたのであれば、日本もピラミッドの頂点にしなければと、日本版の「中華思想」を構想したわけです。しかし、日本と中国は隣国同士です。日本にとっての周辺諸国は、中国や新羅などですから、日本版中華思想を成立させるためには、そうした国々を支配下におさめなければなりません。そこで、日本は「建前」として、中国や新羅を属国（日本に服従する国）として扱うようになったのです。

このようなことが背景となって、日本は客観的には中国の中華思想の中に組み込まれながらも、主観的にはそれを否定していたという不均衡な関係が出来上がりました。しかし、このような「本音」と「建前」が入り組んだ状態は長くは続きません。いざ、日本・新羅・唐の三方国が向かい合うときには、力関係が明確になりますから、日本は「建前」を維持

することはできません。そんな外交上の修羅場を日本はいかに乗り越えてきたのか。このような問いが東大日本史では出題されました。ただ外交上の問題として捉えるというよりは、皆さんはぜひ日本の視点に立って、「自分だったらどうしていたらどうか」と考えながら問題を読み解き、日本史の面白さに触れてみてください。

それではさっそく東大日本史の問題を確認してみましよう。全ての文章を理解する必要はありません。問題の趣旨を確認してみるくらいの気持ちで構いませんから、まずはざっと目を通してみてください。

# 問題編

次の(1)～(4)の8世紀の日本の外交についての文章を読んで、下記の設問に答えなさい。

- (1) 律令法りつりょうほうを導入した日本では、中国と同じように、外国を「外蕃がいばん」「蕃国」と呼んだ。ただし唐を他と区別して、「隣国」と称することもあった。
- (2) 遣唐使おわたものこ大伴古麻呂こまろは、唐の玄宗皇帝げんそうの元日朝賀げんじつちやうが(臣下から祝賀をうける儀式)に参列した時、日本と新羅とが席次を争ったことを報告している。8世紀には、日本は唐に20年に1度朝貢する約束を結んでいたと考えられる。
- (3) 743年、新羅使は、それまでの「調ちやう」という貢進物の名称を「土毛どもう」(土地の物産)に改めたので、日本の朝廷は受けとりを拒否した。このように両国関係は緊

張することもあった。

(4) 8世紀を通じて新羅使は20回ほど来日している。長屋王ながや おうは、新羅使の帰国にあたって私邸で饗宴きょうえんをもよおし、使節と漢詩をよみかわしたことが知られる。また、752年の新羅使は700人あまりの大人数で、アジア各地のさまざまな品物をもたらし、貴族たちが競って購入したことが知られる。

## 設問

この時代の日本にとって、唐との関係と新羅との関係のもつ意味にはどのような違いがあるか。たて前と実際との差に注目しながら、180字以内で説明しなさい。

(東京大学2003年第1問、一部改題)

いかがでしたでしょうか。東大受験生であっても、史料で提示される内容は初見のことが多く、戸惑うものです。今回の問題も、ややマニアックな史料が用いられていますから、知らない単語があっても、気にする必要はありません。

東大日本史の多くの問題では、四つから五つ程度の史料と設問が与えられます。設問で問われている内容は、史料を丁寧に読み解くことで解答ができるようになってきているため、粘り強く読み解いていきましょう。なぜ東大側はこのような史料を用意したのかという背景を考察できれば、設問で解答すべき内容が見えてきます。まずは、一つずつ史料を読み解きながら、どのようなことが問題となっているのかを把握していきましょう。

(1) 律令法を導入した日本では、中国と同じように、外国を「外蕃」「蕃国」と呼んだ。ただし唐を他と区別して、「隣国」と称することもあった。

まず、律令法という用語が登場していますが、これは国内改革の一環として中国から導入してきた法律のことです。つまり、「律令法を導入した日本では」という表現は、「中国を見本として国内改革を進めてきた日本では」という趣旨を表しています。

次に「中国と同じように、外国を『外蕃』『蕃国』と呼んだ」という部分についてですが、これは先ほど紹介した「中華思想」の話と密接に関わっています。中国はピラミッドの頂点として、周辺諸国を支配していたわけですが、その周辺諸国のことは「野蛮な国」

であると認識していました。そのため、中国の周辺にある国々には、野蛮な国を意味する「外蕃」「蕃国」といった差別的な名称が用いられました。こうした中華思想の発想を日本も取り入れようと考えていたため、日本も中国と同様に、外国のことを「外蕃」「蕃国」と呼んだのです。

続いて「ただし唐を他と区別して、『隣国』と称することもあった」という部分についてです。日本は、日本をピラミッドの頂点とする外交秩序を作ろうと考えていたにもかかわらず、なぜ唐だけを区別して「隣国」と呼んでいたのでしょうか。

多くの方は、「唐が日本よりも圧倒的に国力で上回っていたために、いくら建前とはいえ、唐のことを『野蛮な国』とは言えなかったのではないか」と考えたと思います。事実、塾や予備校の解答解説でも、上記のような説明がなされていることが多いのですが、これでは分析が不十分だと思います。そもそも、「建前」とは現実に即していない立場のことで、もし、唐のことを蕃国と呼べないのであれば、同じく新羅も蕃国とは呼べないはず。つまり、このように考えてしまうと、唐だけ特別扱いされている理由が不明確になってしまふのです。

それではどのように解釈するのが良いのか。実は、今回の（1）の史料には一つだけ不

思議な点があります。それは、日本と中国の外交に関する話をしていながらもかかわらず、なぜ「律令法」という国内情勢の話が、形容部分として登場しているのかという点です。

先ほど、『**律令法を導入した日本では**』という表現は、『中国を見本として国内改革を進めてきた日本では』という趣旨を表しています」という説明をしました。そのときは簡単に触れるだけでしたが、この箇所はよく考えてみると不思議なのです。国内改革を進めていることと、外交上で他国のことをどう呼ぶのかということとは、本来、全く関係のないことです。しかし、あえて東大側がこのような文章を提示してきたということは、その裏に隠された意図があるはずです。この点について、さらに深掘りしてみましょう。

解釈のポイントは、「律令法」です。先ほど、律令法とは中国から輸入してきた法律だという話をしました。法律というのは、日本国内の人々が全員守らなければならないものです。つまり、法律は人々の生活に大きく関わるものだったわけですが、こうした重要なものごとは、国内改革の必要性に合わせて、一気に進められました。すると、当然「そんな制度は必要なのか」という反発も起ります。しかし、当時の日本は、「中国の最新の制度なのだから一刻も早く導入した方が良い」と「中国のものだから」を理由に改革を進めていたわけです。

ここまで聞くと勤の鋭い方は気づいたかもしれませんが、日本は国内改革を進めるために、国内の人々に向けて、中国の面子<sup>メンツ</sup>を立てる必要があったのです。「これは野蛮な国の法律だから導入した方が良い」なんて言えるわけありません。法律のみならず、政府機関の仕組みや都市の仕組み、税制度の仕組みなど、様々な制度を中国から輸入していた以上、中国のことはせめて「隣国」として説明する必要があったのです。このことを根拠付けるものとして、「ただし唐を他と區別して、『隣国』と称することもあった」という部分が挙げられます。「隣国」と称すること「も」あったということは、日本国内で「隣国」と呼ばないときもあつたわけです。中国から輸入した制度を運用してもらわなければいけない一般の人々に対しては、「隣国」と呼びつつも、日本の外交を担っていた天皇側近の人々の間では、「外蕃」「蕃国」と呼びながら、日本版の中華思想の体裁を保っていたということでしょう。

ここまでを踏まえると、「日本国内では日本を中心とした外交秩序の『建前』を維持していたが、国内改革との兼ね合いで、中国を『隣国』扱いせざるを得なかつた事情もあつた」ということが読み取れるでしょう。

皆さん、驚きましたか？ 一つの文章だけでこれほどまで分析をするのかと。しかし、

これこそが東大日本史の醍醐味<sup>だいごみ</sup>です。一つの史料から、歴史を貫く思考法が見えてくるところが深みでもあり、面白みでもあります。

一つ目の文章は、まずは皆さんに東大日本史に慣れてもらおうと少し丁寧に説明をしました。ぜひ自分が東大受験生になった気持ちで、続きの史料も読み解いていきましょう。

(2) 遣唐使大伴古麻呂は、唐の玄宗皇帝の元日朝賀（臣下から祝賀をうける儀式）に参列した時、日本と新羅とが席次を争ったことを報告している。8世紀には、日本は唐に20年に1度朝貢する約束を結んでいたと考えられる。

遣唐使大伴古麻呂という言葉が登場しましたが、こちらは日本の代理人です。彼は、唐の皇帝が開催した儀式にて、新羅の人々と席次をめぐる争ったということが説明されています。「席次を争う」という表現がイメージしにくいかもしれませんが、これは「どちらの方が偉いのか」で争ったと理解すると良いでしょう。

ちなみに、席次という考え方は日本において、ビジネスマナーという形で存在しています。応接室や和室、レストランなどで、どこに目上の人が座ったら良いのかというマナー

のことです。実は、こうした日本における席次のマナーの起源は、「遣隋使や遣唐使の人々が中国の儀式で学んだこと」にあると言われていています。新羅など他の国の人々と席次をめぐって争った経験が、日本に持ち込まれて、今にいたるビジネスマナーとなっていると考えたと、歴史のつながりが感じられて面白いですね。

少し話が脱線したので本題に戻りましょう。日本は新羅と席次をめぐって争ったと書かれています。日本の建前としては、新羅は「蕃国」だったはず。相手が野蛮な国の使節なのであれば、席次で争うわけでもないのですが、それはあくまでも建前です。日本の本音としては、「唐には敵かなわないけど、新羅には勝てるかな」くらいに思っています。つまり、新羅を属国として扱えないことはさておき、日本が新羅より下の扱いを受けることだけは、何としても避けたかったわけです。そのため、日本側は必死になって新羅と席次をめぐって争いました。

この話の結末が気になるのですが、残念ながら争いの決着については、史料に書かれていません。そのため、結末は推測するほかありません。ただし、史料の文言に注意深く着目すると、「遣唐使大伴古麻呂は……席次を争ったことを報告している」とあります。当然、このことを報告した相手は、日本の天皇や貴族など当時の政治を動かしていた人々

です。もし席次を争った結果として、日本の方が新羅より優位な席次を得たのであれば、その結果を誇らしく報告していたことでしょう。つまり、大伴古麻呂が「席次を争った」と伝えたということは、結果としては席次で新羅に負けてしまったが、我々は健闘したのだというアピールだったのかもしれませんが。

8世紀には、日本は唐に20年に1度朝貢する約束を結んでいたと考えられる。

この部分は、後ほど登場する(4)の史料の「8世紀を通じて新羅使は20回ほど来日している」という部分と比較すると良いでしょう。新羅使とは、新羅から日本に来る使節のことです。8世紀(701年～800年)を通じて20回来日したということは、平均すれば、5年に1回のペースです。日本が唐に朝貢する回数の4倍、新羅は日本に朝貢していたということですから。このことが何を示すのかは、後ほど一緒に確認しましょう。

続いては史料(3)です。

(3) 743年、新羅使は、それまでの「調」という貢進物の名称を「土毛」(土地の物

産)に改めたので、日本の朝廷は受けとりを拒否した。このように両国関係は緊張することもあった。

注目すべきは『調』という貢進物』という表現です。貢ぎ進める物ということとは、新羅は日本に対して朝貢を行っていたということです。つまり、この部分では、日本が新羅を建前としてではなく、事実として「蕃国」扱いできていたということが読み取れます。しかし、「調」という貢進物が「土毛」(土地の物産)という名称に変わったということは、新羅が日本の属国としての地位に反発したことを意味します。もともと貢物と呼ばれていたものが、急にお土産みやげとして渡されるようになったわけです。日本の朝廷は、新羅を属国として維持できるよう、「土毛」の受け取りを拒否し、対抗しました。このような変化を意識して「両国関係は緊張することもあった」と史料では説明されています。

ここまですが史料の表面的な読解です。そして問題の核心は、なぜ新羅は日本に朝貢していた時期があったのかということなのです。実はこの点、史料には明確に書かれていないのですが、ここまでの読解内容を総合すれば、理由を発見できます。

まずは、新羅の置かれていた状況を思い出してみましよう。新羅は日本と同じく、唐(中

国)の中華思想の中に組み込まれていました。そして、新羅は、日本とは異なり、唐(中国)と大陸続きの朝鮮半島を支配下においていたわけです。皆さんが新羅の王様であれば、どのように思うでしょうか。日本が、唐や新羅に攻められるかもしれないと恐れて国内改革を行ったように、新羅の人々も隣国と戦争になる可能性は当然考慮していたはずで、海に囲まれていた日本に比べて、陸続きであった新羅は、唐(中国)に攻められたときのリスクが断然高くなります。しかし、そのような状況下で、唐(中国)に対抗しようとしても、新羅一国では歯が立ちません。そこで、新羅は、対立関係にあった唐を牽制するた<sup>けんせい</sup>めに日本を味方につけ、小国同士で唐(中国)に対抗しようと試みたと考えられます。

ただし、新羅にとっては日本だって敵国になるかもしれない存在です。常に日本の味方をしていては、日本に裏切られたときに大変な事態となってしまう。そこで、新羅は、唐(中国)と日本に挟<sup>はさ</sup>まれた小国として、日本の支配下に入ったり、入らなかつたりと調整を繰り返し、外交上優位に立とうとしたのでしょう。

つまり、新羅が日本に対して「調」を送っていた時期は、新羅は唐との関係が悪化していたと考えられます。他方で新羅が日本に対して「土毛」を送ろうとした時点では、新羅と唐の関係性が改善し、日本を頼る必要性がなくなったということが考察できます。この

ように、史料(3)からは「本音」と「建前」を使い分けていたのは、日本だけでなく、新羅も同様であったということが読み取れます。「調」と「土毛」という二つの用語から、ここまで歴史の背景が分析できるのは、まさに、東大日本史の醍醐味ですね。

最後に史料(4)を読解してみましよう。

(4) 8世紀を通じて新羅使は20回ほど来日している。長屋王は、新羅使の帰国にあたって私邸で饗宴をもよおし、使節と漢詩をよみかわしたことが知られる。また、752年の新羅使は700人あまりの大人数で、アジア各地のさまざまな品物をもたらす、貴族たちが競って購入したことが知られる。

史料内では「長屋王」という人物が登場していますが、彼は日本の皇族です。すなわち、「長屋王は、新羅使の帰国にあたって私邸で饗宴をもよおし、使節と漢詩をよみかわしたことが知られる」という文章は、日本が新羅から来た人たちをもてなして、漢詩を詠むなどの文化交流をしたということを表しています。この部分にだけ着目すると、日本が新羅と仲が良かったことを表している史料のように思えるのですが、実は異なります。

人々にご馳走を振る舞って、漢詩を詠み交わす。このおもてなしは、中国が、朝貢に来た使節団に対して行ってきた振る舞いと全く同じです。中国は、朝貢に来た人々に対して、豪華すぎる食事や企画を用意することで、自分たちの権威を表そうとしていました。言い換えれば、見栄を張っていたということ、朝貢に来た人々に対して中国の繁栄度合いを見せつけようとしていました。こうすることで、中国の周辺諸国は、中国の権威に頭が上がりなくなりますから、上下関係がより確かなものになったわけです。

そこで、日本も全く同じことを試みます。日本は、新羅から来た人々に対して、ご馳走を振る舞い、漢詩を詠み交わすことで、自分たちの方が国としての地位が高いことを示そうとしました。しかし、これは建前に過ぎませんでした。史料の「752年の新羅使は700人あまりの大人数で、アジア各地のさまざまな品物をもたらし、貴族たちが競って購入したことが知られる」という部分では、新羅の人々がもたらした品物を、日本の貴族たちが欲しがっていた様子が書かれています。つまり、建前としては「日本の方が豊かな国だから、新羅の人々に、日本の美味しいご馳走を振る舞うよ」という姿勢を見せつつも、本音としては「新羅のものはとても貴重だから、もっと日本に持ってきてほしい」と思っていたわけです。

新羅より上の立場として振る舞わなければいけない日本が、「新羅さんお願いです。私たちにアジアの品物を恵んでください」とは言えません。そのため、あくまでも日本と新羅の交流は、朝貢という形で行われていたわけですが、実際にはアジアの品物を手に入れる絶好の機会として、日本側は新羅使を重宝していたのだということがわかります。

「なるほど！」とここまでの分析に納得した方も多いと思うのですが、実は、ここまでの分析には一点だけ不自然な点が残っています。それは、三つ目の文章の「また、752年の新羅使は700人あまりの大人数で、アジア各地のさまざまな品物をもたらし、貴族たちが競って購入したことが知られる」という部分です。

日本にとって新羅はアジアの品物をもたらしてくれる貴重な国だったということを示すだけであれば、「752年の新羅使は700人あまりの大人数で」という表現は不要なはずです。「新羅は……アジア各地のさまざまな品物をもたらし、貴族たちが競って購入したことが知られる」とだけ記載しても問題なかったはずなのに、なぜ東大側は「752年の新羅使は700人あまりの大人数で」という表現を挿入したのでしょうか。

実はこの問題、深掘りをすると新羅の「本音」が見えてきます。先ほど、新羅は唐との対立関係を踏まえて、日本の支配下に入ったたり、入らなかつたりしたという話をしました。

その内容を踏まえれば、「新羅が日本に対して朝貢をしていたのは、あくまでも軍事上の視点からだ」という話になりそうです。しかし、もし新羅が本音では日本に朝貢したくないと思っていたのであれば、700人もの人数で日本に行くことはないでしょう。やむを得ず日本に派遣するだけなら、10人や20人程度でも良さそうです。そのため、ここで出てくる疑問は「なぜ新羅は700人もの人数で日本に押しかけたのだろうか」というものです。

ヒントは「貴族たちが競って購入したことが知られる」という部分です。新羅の人々もたらした品物は、全て日本にプレゼントされていたわけではありません。購入したと書かれていますから、新羅の人々は日本の貴族を相手に商売をしていたということ。「別に商売をしたいただけなら自国ですれば良いではないか」と思った方もいるかもしれませんが、この時代は手数料がありえないほど高い時代です。遠い国で商品を売れば、商人たちは大儲けおもちをすることができたのです。

現代であれば、オンライン通販で商品を頼んだときの送料は、数百円から数千円程度です。しかし、当時は車も電車もなく、陸路は徒歩や馬車で、海路は人力船で移動していたような時代です。異国で商売ができれば、手数料・送料を加えて自国で売るときの何十倍もの値段で販売できました。そのため、新羅使の人々からすれば、持ち寄った商品を競い

合って購入してくれる日本は、「経済的に」貴重な存在でもあったわけです。確かに、日本の属国扱いされることは、新羅の人々にとって本望ではなかったでしょうが、お金儲けで済むなら悪くないという考え方もあったはずですよ。つまり、新羅からすれば「建前」として日本を朝貢先としながらも、「本音」としては、商売相手と思っていたわけですよ。

ここまでの話をまとめると、日本は新羅をアジアの品物を入手するための流通ルートとして重宝していたのと同様に、新羅も日本を自国の商品を販売する取引先として重宝していたということがわかります。このように、700人という数字からだけでも、一国の裏事情が浮かび上がってくるのは面白いですね。

以上までで史料の読解は終了です。ここまで読解してきた内容を踏まえて、設問を再度確認してみましょう。

この時代の日本にとって、唐との関係と新羅との関係のもつ意味にはどのような違いがあるか。たて前と実際との差に注目しながら、180字以内で説明しなさい。

設問では、日本と唐、そして日本と新羅の二つの関係性について、「本音」と「建前」の

二面性に着目しながら解答することが求められています。それでは、史料で読解した内容を設問の通りに整理してみましょう。

### 日本と唐の関係

「建前」…日本は唐と対等、あるいは唐を支配する関係にある。（史料1）

「本音」…日本は唐から最新の制度や文化を学んでおり、朝貢を通じて唐の支配下に入る必要があった。（史料1、2）

### 日本と新羅の関係

「建前」…日本は新羅を支配する関係にある。（史料1）

「本音」…日本が新羅を支配できるかどうかは、唐と新羅の関係性に依存しており、実質的には日本と新羅は対等な関係にあった。また、新羅からもたらされる品物は、日本にとって貴重なものだった。（史料2、3、4）

設問では、日本と唐および日本と新羅の関係性を説明することに加えて、その意味の違

いが問われています。日本はなぜ唐との関係が重要だったのかといえ、日本は唐から最新の制度や文化を学んでいたからでした。また、日本はなぜ新羅との関係が重要だったのかといえ、日本は新羅からアジアの品物という貴重な物資を手に入れていたからでした。こうした背景によって、日本は「建前」としては唐や新羅を属国扱いしたくても、「本音」としては、対等あるいは自分たちよりも進んだ先進国として外交関係を結ばなければいけなかったのです。こうした内容を180文字以内にまとめれば、解答が完成します。本書では、各問題の末尾に筆者が作成した解答を掲載しておきますので、ぜひ記述問題に取り組んでみてから、答えを確認してみてください。

## 筆者の 解答

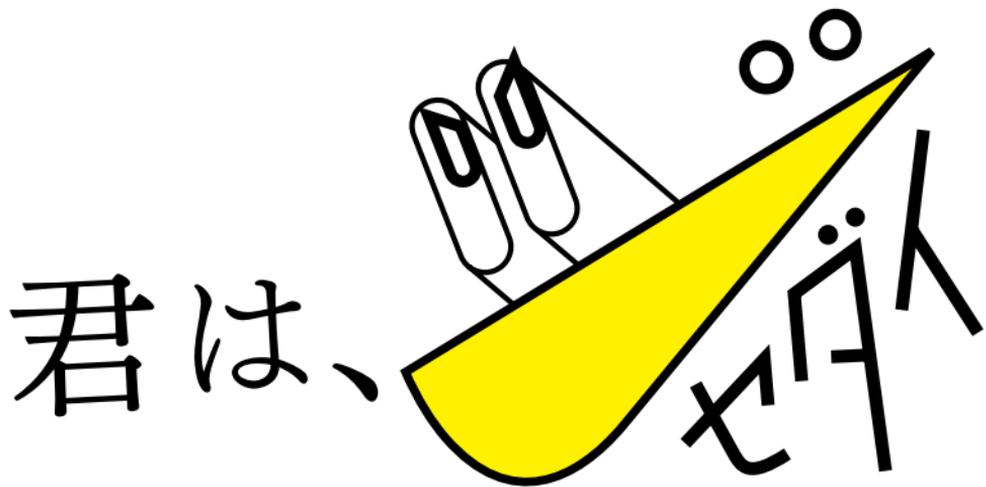
日本は唐や新羅を、自らを頂点とする外交秩序のもとに位置付けようとしたが、それは建前に過ぎなかった。唐は日本が国内改革をする際の見本としての役割を担っていたし、新羅は日本がアジアの品物入手する流通ルートとしての役割を担っていた。そのため、新羅が唐との対立関係から日本に朝貢することはあったものの、実際には、日本

.....

は唐の支配下に入り、新羅と地位を争っていた。

(177字)

.....



君は、

ジセダイ

何と闘うか？

<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

**ジセダイイベント**

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

**ジセダイ総研**

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

**星海社新書試し読み**

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

**行動せよ!!!**